

「グスコープドリの伝記」論

―「家族」と「死」の視点から―

大 島 丈 志

一、はじめに

宮沢賢治の散文には、意外に「家族」を描いたものが少ない。また、「家族」が描かれる場合でも、「雪渡り」のように両親が描かれなかったり、「銀河鉄道の夜」のように、父親が遠方にいて不在であったりと、不安定な「家族」が描かれる傾向にある。不安定な「家族」を考察することは、賢治の散文読解の一つのポイントであるといえる。

「グスコープドリの伝記」は、主人公ブドリと妹のネリ、彼らの両親という「家族」の幸福な生活とその崩壊から始まる物語であり、賢治の散文における「家族」の描かれ方を考察する上で、非常に重要な作品である。

本論文では、家族論の視点から、「グスコープドリの伝記」における「家族」と主人公ブドリの「死」について考察していきたい。

二、先行研究の問題点と本論文の目的

「グスコープドリの伝記」は、雑誌『児童文学』第二冊（昭和七年三月十日）に発表された宮沢賢治晩年の作品である。この作品は、当時の岩手県の厳しい冷害状況を背景として成立している。次に「グスコープドリの伝記」の概略を挙げる。

主人公ブドリは、木樵^{きせう}りの子供としてイーハトーヴの大きな森に生まれる。ブドリが十歳になったとき、イーハトーヴは冷害に襲われる。冷害によって農作物は大減収し、飢饉^{きげん}が起る。主人公ブドリの両親は餓死から我が子を救うために、自ら家を出て森に入って死に、子供に食料を残す。しかし、ブドリの妹ネリは、飢饉の惨状につけ込んだ人攫^{さら}いにさらわれてしまい、ブドリの「家族」は崩壊する。孤独となったブドリは、森のてぐす工場^{てぐすこう}で働くが、火山の噴火でてぐすが全滅したため野原へと向かう。野原にてブドリは赤鬚^{あかひげ}の主人に雇われ、彼の家に住み込みオリザ栽培に従事する。しかし、寒さや旱魃^{かんぱ}による減収のために、赤鬚

の主人の沼ばだけは縮小してしまう。仕事のなくなったブドリは、仕方なく都市へと移動する。ここで、クーボー大博士の試験に合格したブドリは、イーハトーブ火山局の技師となる。その後、ブドリの「家族」を崩壊させた冷害が再びやってくることを知ったブドリは、冷害から人々を救う為に自らの命を捨てて火山を爆発させる。ブドリの「死」によって気候は変わり、冷害は回避される。

従来、作品終結部においてブドリが「死」を選択した原因として、ブドリが幼少期に体験した冷害による「家族」の崩壊が挙げられてきた。栗原敦は、ブドリが「死」を選択したと「家族」との関係について次のように述べる。

ブドリの両親が、こどもたちを生きのびさせるために、強い決意で森の奥に去っていったように、ブドリの選択は、「たかさんのブドリのお父さんやお母さん」や「たかさんのブドリやネリ」への激しい愛の表われ以外の何ものでもなかったのである。^三

栗原は、冷害による飢饉によって森で「家族」と生き別れた体験が、ブドリの中で「たかさんのブドリのお父さんやお母さん」といった多くの「家族」を救いたいという形で拡大されていき、その拡大された「家族」への愛情のためにブドリが死んだと主張した。

秋枝美保は、ブドリの「死」について賢治がどのような意図を持っていたかについて次のように述べる。

父母の死によって生を得たブドリが、今度は自らの死をもって他の生命の存続を助けるという一貫した流れを賢治は描こうとしているのである。^四

秋枝は、栗原論を発展させており、賢治はブドリの「死」を「たかさんのブドリのお父さんやお母さん」のためだけではなく、他の生命のために生命を捧げるといふ、生命の連鎖の表現として描いたと主張した。中野新治は、ブドリが、名高い木樵りの父のもと、至福の中で育ったことを指摘し、次のように述べた。

ブドリが十歳、ネリが七歳になるまでこのような聖なる絶対性は崩れることはなかった。その至福の中で育ったブドリは以後この聖なる絶対性を破壊した自然と戦い、それを回復させるために自分の人生を献げたと言うことができる。^五

さらに中野は、植物が多量の生命を生むように、ブドリの「死」によって「たかさんのブドリやネリたちが、ちやうど散らばった種子のように生命を与えられたのである。」と論じた。^六

このように、従来、ブドリが「死」を選択する一つの要因として子供のために自らの命を捨てた両親の存在が指摘されてきた。

栗原らの述べるように、ブドリの「死」に彼の両親の「死」が関連しているという主張は肯定できる。ただ、従来の論では、ブドリの「死」の意味を解釈するために両親の「死」を使用している。そのため、「グ

スコープドリの伝記」における「家族」に対する考察は、不十分な状態となっている。

そこで、本論文では「家族」という視点を中心として「グスコープドリの伝記」の考察を行う。

その方法として、第一に、先駆作品「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」(以下「ネネムの伝記」と省略)・下書稿「グスコンブドリの伝記」から発表作品「グスコープドリの伝記」に至る各作品における「家族」の描かれ方を比較考察する。そして「グスコープドリの伝記」において「家族」がどのように描かれているのか、その特徴を明らかにする。

第二に、作者宮沢賢治の「家族」観がどのように変わったのかを、先駆作品「ネネムの伝記」から「グスコープドリの伝記」発表までの期間内で考察し、賢治の「家族」観から「グスコープドリの伝記」の背景を明らかにする。

最後に、第一・第二の結果を踏まえた上で、「グスコープドリの伝記」における、「家族」とブドリの行動との関わりを考察する。

三、「グスコープドリの伝記」における「家族」

「グスコープドリの伝記」には、先駆作品としてばけもの世界を舞台とした「ネネムの伝記」と、下書稿「グスコンブドリの伝記」が現存する。

母胎作品「ネネムの伝記」(大正十一年成立と推定)から大きな改作

を経て、下書稿「グスコンブドリの伝記」(大正十四・十五年成立と推定)となり、さらに筋立てにほとんど変化はないものの、草稿数が七八枚から六十枚と約三分の二に圧縮されて発表作品「グスコープドリの伝記」(昭和六年一月以降八月以前成立と推定)が成立した。なお、「ネネムの伝記」から「グスコンブドリの伝記」へと至る大幅な改作の過渡的段階を示すものとして「ペンネンノルデ」を主人公とした創作メモが現存している。

「ネネムの伝記」から「グスコープドリの伝記」への変遷において、「家族」の捉えられ方はどのように変化したのだろうか。各作品に描かれた「家族」を比較することによって、「グスコープドリの伝記」における「家族」の特徴を解明する。

まず、主人公の両親の描かれ方について考察を行う。

先駆作品「ネネムの伝記」では、飢饉の際、主人公の両親は子供に食料を残さず森へ去ってしまう。「ネネムの伝記」の冒頭部分を挙げる。

(傍線論者)

その年は暮れましたが、次の春になりますと飢饉はもうとてもひどくなってしまいました。

ネネムのお父さん、森の中の青ばけものは、ある日頭をかくへていつまでもいつまでも考へてゐましたが、急に起きあがって、「おれは森へ行って何かさがして来るぞ。」と云ひながら、よろよろ家を出て行きましたが、それなりもういつまで待っても帰って来ませんでした。たしかにばけもの世界の天国に、行ってしまったの

でした。

ネネムのお母さんは、毎日目を光らせて、ため息ばかり吐いてゐましたが、ある日ネネムとマミミとに、

「わたしは野原に行って何かさがして来るからね。」と云って、よろよろ家を出て行きましたが、やはりそれきりいつまで待っても帰って参りませんでした。たしかにお母さんもその天国に呼ばれて行ってしまったのでした。

ネネムは小さなマミミとたゞ二人、寒さと飢えとにガタガタふるえて居りました。^七

「ネネムの伝記」において、両親の「死」は語り手によって傍線部のように簡略に語られるのみであり、主人公が両親の「死」を知ったという記述は見られない。この後「ネネムの伝記」は、奇怪なわけもの世界を舞台として、急激に出世してゆく主人公が慢心して失敗する場面で幕を閉じる。「ネネムの伝記」の主人公は両親の「死」を認識することなく、「家族」の「死」になんら束縛されない自由な後半生をおくることとなる。

下書稿「グスコブドリの伝記」での、主人公の両親が飢饉から子供を救うため森へ去るという設定は「ネネムの伝記」と同様である。ただし、「グスコブドリの伝記」では、主人公の母親は子供たちに食料を残して森へと去って行く。

晩方になって森がもう黒く見えるころお母さんにはかに立って

炉に櫓をたくさんくべて家ぢゅうすっきり明るくしました。それからわたしはこれからお父さんをさがしに行ってくるからお前たちはうちに居てあの戸棚にある粉を二人ですこしづつたべなさい〇^ア云ってやっぱりよろよろ家を出て行きました。二人は何だか大へんかなしくなって泣いてあとから追って行きますとお母さんはふり向いて「何たらいふことをきかない児だ。」と叱るやうに云ひました。そしてまるでつまづくやうに足早に森の中にはいつてしまつてました。^ハ

「グスコブドリの伝記」において母親が主人公たちに食料を残したということは、母の子供に対する愛情をつよく表現している。

この描写から、「グスコブドリの伝記」では、「ネネムの伝記」に比べ、親の子供に対する愛情が増していることがわかる。

一方で、「グスコブドリの伝記」では、両親が死んだという事実は明確には描かれていない。ただし、主人公の見る夢に「そのうちお父さんが何べんもブドリの枕もとを何かさがす様子で歩いてゐました。」^九という描写がある。この父親が枕もとに立つという物悲しい夢は、読み手に両親の死を暗示させると同時に、主人公が両親の死を知った可能性を暗示しているのである。この点で「グスコブドリの伝記」では、主人公にとっても「ネネムの伝記」に比べて、親の存在が大きくなっていることがわかる。つまり「グスコブドリの伝記」において、親の子供を思う気持ち・子供の親を思う気持ちといった親子の相互関係が成立したと考えられるのである。

発表作品「グスコブドリの伝記」では、下書稿「グスコブドリの

伝記」と同様に、主人公の両親は子供たちに食料を残して森へはいり行方不明となる。「グスコンブドリの伝記」同様、この描写には親の子供に対する愛情が表されているといえる。

しかし「グスコーブドリの伝記」においては、「ネネムの伝記」・「グスコンブドリの伝記」とは異なり、主人公が両親の「死」を認識し、妹ネリと共に両親の墓参りをするという描写が加筆される。次にその部分を抜粋する。(傍線論者)

ある日、ブドリのところへ、昔てぐす飼ひの男にブドリといつしよに使はれてゐた人が訪ねて来て、ブドリたちのお父さんのお墓が森のいちばんはづれの大きな榎の木の下にあるといふことを教へて行きました。(中略―論者) ブドリは、「す」ぐネリたちをつれてそこへ行つて、白い石灰岩の墓をたてて、それからその辺を通るたびにいつも寄つてくるのでした。

前述したように、発表作品「グスコーブドリの伝記」の草稿は、下書稿「グスコンブドリの伝記」に比べて分量で約三分の二に圧縮されている。それにもかかわらず、主人公が両親の死を認識し、墓参りをするという描写に多くの行が割かれて、加筆されていることは注目しなければならない。さらに主人公の墓参りの描写には、「すぐ」「通るたびにいつも」といった、強調の表現が用いられていることがわかる。

ブドリやネリが、「すぐ」「いつも」両親の墓参りを行うということは、残された子供の両親に対する愛情深さを表現していると考えられる。

以上より、「グスコーブドリの伝記」には、親と子供の双方に、相手に対する強い愛情の描写がある事がわかる。そして先駆作品・下書稿と比較すると、「グスコーブドリの伝記」では、主人公ブドリと「家族」が、より親密な相互関係で結ばれているということが出来るのである。

今度は、各作品における赤鬚の主人の「家族」の描かれ方を考察する。赤鬚の主人は、主人公が森を出て、野原にたどり着いた際に、彼を労働力として雇用すると同時に、親代わりとなる人物である。このことから赤鬚の主人は、主人公にとって、「家族」に近い存在として位置付けられる。赤鬚の主人は先駆作品「ネネムの伝記」には登場しないため、下書稿「グスコンブドリの伝記」と発表作品「グスコーブドリの伝記」との間で比較、考察を行う。

「グスコンブドリの伝記」・「グスコーブドリの伝記」の両作品において、野原に出た主人公が赤鬚の主人の下で労働力として働く一方で、農業に関する技術を学ぶという設定、さらに赤鬚から渡された本を読み、独学で学習するという設定は共通である。では、どのような相違点があるのだろうか。

下書稿「グスコンブドリの伝記」では、赤鬚の主人の「家族」には主人公の他に「こども」がいる。この「こども」は、主人公と共に農作業を行うだけではなく、主人公の世話も焼く。赤鬚の主人の「家族」に「こども」が描かれることによって、主人公は赤鬚の主人にとって、「家族」の中の唯一の子供ではなく、一人の労働力としての役割が大きいということが出来る。「グスコンブドリの伝記」において、主人公が赤鬚の主人から本を渡される場面は次のように表現される。(傍線論者)

「ブドリ今年は沼ばだけは去年より三分の一へらしたからな。仕事は去年より楽だぞ。その代りおれはどうも字が読めないでな。おれも読みたくて、いままで何十冊も買ったんだが、買ってみると読めなくてな。おまへいくらか読めるようだから一生けん命オリザの作り方だのこやしのことだの勉強してくれな。」^二

以上のように、主人公が赤鬚の主人から本を渡された理由は、赤鬚の主人が文盲だった為であった。

一方、発表作品「グスコブドリの伝記」では、赤鬚の主人の「こども」は、死亡したと言う設定に変更されている。そして「グスコブドリの伝記」では、主人公は赤鬚の主人から次のように本を授けられる。
（傍線論者）

「ブドリ、今年は沼ばだけは去年よりは三分の一減ったからな、仕事はよほど楽だ。その代りおまへは、おれの死んだ息子の読んだ本をこれから一生けん命勉強して、いままでおれを山師だといつてわらったやつらを、あつと云はせるやうな立派なオリザを作る工夫をして呉れ。」そして、いろいろな本を一山ブドリに渡しました。^三

主人公ブドリが本を渡される理由は、「立派なオリザを作る」ということにあり、その点で「グスコブドリの伝記」と同様である。しかし、赤鬚の主人は、死んだ息子が読んだ本を主人公に託す。このことから「グスコブドリの伝記」において、赤鬚の主人は、ブドリを立派なオ

リザを作るという、自らの意思を継いでもらえる存在として捉えていることがわかる。

さらに言えば、「グスコブドリの伝記」では、「家族」内に「こども」のいる下書稿「グスコブドリの伝記」とは違い、赤鬚の主人に「こども」がいないという設定が、赤鬚の主人とブドリとの間に擬似的な親子関係を生じさせている。赤鬚の「家族」に「こども」がいないことによって「グスコブドリの伝記」の主人公は赤鬚にとって養子のような存在となるのである。その結果、両者の相互関係は強まり、赤鬚の主人の思いは、直接ブドリに託されることになるのである。

このように赤鬚の主人の「家族」の描かれ方を、「グスコブドリの伝記」と「グスコブドリの伝記」とで比較すると、「グスコブドリの伝記」においては、主人公と赤鬚の主人との関係が主人・使用人の枠を超えて、擬似的な親子という、親密な関係になっていることがわかる。

以上、ブドリの両親、赤鬚の主人という二つの「家族」の描かれ方を、先駆作品・下書稿から比較・考察してきた。その結果、「グスコブドリの伝記」では、先駆作品・下書稿に比べて、主人公と両親・赤鬚の主人との相互関係が親密なものとして描かれていることがわかるのである。

四、賢治の「家族」観からみた「グスコブドリの伝記」の背景

なぜ「グスコブドリの伝記」では、主人公ブドリと「家族」との相互関係が親密に描かれるようになったのだろうか。

一つには、雑誌『児童文学』への投稿を意識した改稿が挙げられる。

読者を児童と想定した場合、下書稿「グスコンブドリの伝記」の主人公が夢の中で見る、父親が枕もとで何かを探すといった表現は、あくまでも「死」の暗示であり、森に入っていた両親がどうなったのかに關してはやや説明不足である。そのため読者がブドリの両親の「死」をはっきりと知ることが出来るように、発表作品「グスコンブドリの伝記」ではブドリの墓参りの描写が加筆されたと考えられる。

同時に、『児童文学』という雑誌への発表にあたって、「家族」の愛情を描くことによって読者に道德的效果を与える戦略のあったことが考えられる。子供の親を思う気持ち、親の子供を思う気持ちを強調するため、親子の相互關係が親密になるように加筆がなされたのではないだろうか。

二つ目として、作者宮沢賢治の「家族」観の変化が挙げられる。

まず、「ネネムの伝記」が制作されたと推定される大正十一年前後の賢治の「家族」観を考察する。

大正十年一月二十三日、盛岡高等農林学校研究生を修了し家業を手伝っていた賢治は突然、家出・上京した。彼は、同年八月まで東京にて一人暮らしを行った。賢治の家出の大きな原因は、国柱会に入会した賢治が父政次郎への改宗要請を激しく行ったために生じた家庭内の父子論争であり、家出は緊迫した親子關係からの逃亡であったと考えられている。また、賢治の実家が商家であることも原因の一つにあげられる。賢治は家業である質・古着商を嫌悪していた。賢治が長男であり、近代の「家」制度の中で「家業」を継ぐべき立場にあったことは、彼にとって重圧であったのである。その後賢治は八月の末に帰郷し、同年十二月に稗貫農

学校（大正十二年四月、花巻農学校と改称）の教師となった。この賢治の就職は「家族」に歓迎されたものの父子間の宗教対立は根本的に解決されるものではなかった。こうした状況の中で、大正十年前後の賢治にとって「家族」はあまりにも重い存在であり、脱すべき存在として捉えられていたと考えられる。

このような「家族」観を背景として描かれた「ネネムの伝記」では、作品冒頭で、語り手が両親の「死」を「ばけもの世界の天国へ行ってしまったのでした。」と簡略に語る。その後両親の「死」には全く触れないことからわかるように、作品における両親の存在感是非常に薄い。「ネネムの伝記」における、主人公の両親に対する無関心の背景には、突然の上京にまで高まった作者賢治の親から独立したいという希望が存在すると考察できる。

すでに述べてきたように、先駆作品「ネネムの伝記」から下書稿「グスコンブドリの伝記」への移行にあたっては大きな作品の変換が行われている。「家族」という視点から考察すると、作品内において、親子の親密な關係が成立したことがその特徴である。「グスコンブドリの伝記」において母親が、子供に食料を残すのも、親の子供に対する愛情の強さが現れた表現である。

この下書稿「グスコンブドリの伝記」が制作された大正十四・十五年は、賢治自身にとっても大きな転換期であったのである。

大正十五年（昭和元年）三月末に賢治はそれまで勤めてきた花巻農学校を退職し、四月一日には一人の百姓になるために実家を出る。そして、宮沢家の別宅ではあるが、実家からはやや離れた北上川沿いの下根子の

桜という土地にて、独居生活に入ったのである。

賢治は、三月までの花巻農学校教師の経験を通して子供に対する大人の視点を獲得することが出来たと考えられる。賢治が農学校の生徒の就職斡旋のために、大正十二年樺太にまでわたったことは良く知られている。大正十四年に賢治がこの生徒の一人に宛てた書簡には次のようなメッセージがある。書簡の部分を挙げる。

大正十四年 四月十三日 杉山芳松あて 封書

仕事もずるぶる辛いでせうが、どうかお身体を大切に若いうちにしっかりした一生の基礎をつくって下さい。わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしてゐるわけに行きませんから多分は来春はやめてもう本統の百姓になります。そして小さな農民劇団を利害なしに創ったりしたいと思ふのです。

もしあなたがほんたうに成功ができるなら、それはあなたの誠意と人を信ずる正しい性質、あなたの巨きな努力によるのです。^三

この賢治の書簡からは、働く子供に対する、保護者・指導者としての暖かい視線を感じることが出来るのである。農学校教師の経験は、これまで重い重圧としてしか「家」、特に両親を見ることの出来なかった賢治に、子供を保護する大人の視点を与えたのである。

一方、経済的基盤は親にあるものの、桜での独居生活は、常に賢治が重圧を感じていた「家族」からの表面上の解放を意味していた。このことは、「家族」に対する単なる脱出願望のみではなく、距離を置いて

「家族」を見る視点を賢治に与えたと考えられる。

大人の視点から子供を見ることが可能になったこと、「家族」を多少でも「相対化」して見る視点を獲得したことによって、賢治は、親の子に対する愛情を感じることが出来るようになったと考えられる。

このように、賢治自身の「家族」観の大きな変化は「ネネムの伝記」から「グスコブドリの伝記」への大きな改稿へとつながったのではないだろうか。

さらに「グスコブドリの伝記」では、主人公ブドリと「家族」の相互の結びつきがより強く描かれる。この背景を大正十五年以降の賢治の「家族」観より探る。

大正十五年（昭和元年）より賢治は、実践的農業活動の一つとして、羅須地人協会を設立する。また、肥料設計事務所なども開設し、活発な活動を行った。しかし、これらの活動も賢治の体調が崩れることで、十分な形で終わってしまう。昭和三年八、九月頃賢治は発熱し実家に戻る。十二月には急性肺炎となり、以後長い自宅療養の生活が続くことになるのである。賢治の病状は、昭和五年にはいったん回復したかに見えた。しかし、昭和六年九月に、東北砕石工場の嘱託として上京中に再び発熱病臥し、それ以後は病床に就いたまま、全快することはなかった。「グスコブドリの伝記」の成立はこの上京以前の昭和六年一月以降八月以前と推定されている。

昭和三年の急性肺炎の際、賢治の意識は「死」にかなり接近していた。当時の病がいかに重く、賢治の心境がいかに暗く深刻なものであったかは、彼の詩作によくあらわされている。昭和三年から五年頃の詩作を集

めた「疾中」のなかから作品を挙げる。

夜 一九二九、四、二八、

これで二時間

咽喉からの血はとまらない

おもてはもう人もあるかず

樹などしづかに息してめぐむ春の夜

こゝこそ春の道場で

菩薩は億の身をも棄て

諸仏はこゝに涅槃し住し給ふ故

こんやもうこゝで誰にも見られず

ひとり死んでもいゝのだと

いくたびさうも考えをきめ

自分で自分に教へながら

またなまぬるく

あたらしい血が湧くたび

なほほのじろくわたくしはおびえる^{一四}

この詩作からは「死」を身近に感じながらも、なお「生」にしがみつ
いてしまう自己に対する率直な感情を読み取ることが出来る。

同じく「疾中」の中に収められた詩作には、闘病中の賢治を襲う「死」
の恐怖と「家族」への思いが描かれているものがある。その部分を挙げる。

(傍線論者)

「その恐ろしい黒雲が」

病の痛みや汗のなか

それらのうづまく黒雲や

紺青の地平線が

またまのあたりに近づけば

わたくしは切なく熱くもだえる

あゝ父母よ弟よ

あらゆる恩顧や好意の後に

どうしてわたくしは

その恐ろしい黒〔雲〕に

からだを投げる事ができやう^五

「うづまく黒雲」「紺青の地平線」は、「死」に対する「恐怖」の表現
であると同時に、病の痛みの中で「死」に魅惑されてしまう感情をも吐
露していると思われる。この詩作は、「死」を間近に感じ、「死」に魅惑
されながらも、「家族」から受けた「恩顧」「好意」を考えれば「生」を
選ぶという思いを表現している。傍線部の表現には、「家族」特に両親
に対する強い「感謝」「報恩」の思いが描かれている。このような賢治
の「家族」に対する心境は羅須地人協会が失敗に終わったことに対する
悔恨とともに書簡からも読み取ることが出来る。昭和四年の書簡の部分
を挙げる。(傍線論者)

昭和四年 小笠原露あて 日付不明 下書

根子では私は農業わづかばかりの技術や芸術で村が明るくなるかどうかって見て半途中で自分が倒れた訳ですがこんどは場所と方法を全く変へてもう一度やってみたいと思って居ります。けれども左の肺にはさっぱり息が入りませんしいつまでもうちの世話にばかりなっても居られませんからまことに困って居ります。

六

賢治の言う「場所と方法を全く変へてもう一度やってみたい」という活動が、いったいどのようなものであったか、そこにどのような目標が込められていたかは、今後の研究課題である。ただ、この書簡からは、「家族」に看病されることに對する、申し訳ないと思う賢治の気持ちと、現状を変えていきたいという願いを知ることが出来るのである。

大正十一年前後はただ重荷であった「家族」が、「感謝」や「報恩」の対象へと変わり、賢治の「家族」観は大きく変化した。「家族」からの離脱を背景とした先駆作品「ネムの伝記」で見られた、「家族」に對する希薄な表現は、賢治が教師を経験し、親の子供に對する視点を獲得したことにより変化した。下書稿「グスコブドリの伝記」では、主人公と「家族」との親密な関係が成立したのである。そして、賢治自身が病に倒れ、「死」を意識し「家族」に看病をうけた体験から、「家族」に報いたいという思いが強まったことを背景として、「グスコブドリの伝記」では「家族」とブドリとの相互の結びつきがいっそう強く描かれるようになったのである。

五、「家族」の視点からみたブドリの行動と「死」

これまでに、「ネムの伝記」から「グスコブドリの伝記」への移行において、主人公と「家族」との相互関係が強く表現されるようになったこと、そしてこの相互関係が強く描かれた背景には、雑誌『児童文学』への投稿、教師経験、独居生活、さらに病床の世話をしてもらった「家族」に對する賢治の「感謝」「報恩」の思いがあったことを考察した。

では、「グスコブドリの伝記」における、主人公と「家族」の相互関係の親密さはブドリの行動、そして「死」にどうかかわってくるのであろうか。

「グスコブドリの伝記」において、食料を残していた母親の子供に對する強い愛情は、ブドリの中で両親に對する感謝の気持ちとなった。同時に、両親の死は、ブドリの中に冷害による「家族」の崩壊を何とか克服したいという強い意志を生むこととなったと考察される。このことを表現しているのは、火山局の技師となったブドリが頻繁に両親の墓参りをする場面である。この場面は、親子間の親密な関係を表現すると共に、ブドリにとっては冷害による「家族」の崩壊という無念を確認し、もう決して「家族」の崩壊はさせないという強い決意を固める作業として重要でもあったと考えられる。

さらに、ブドリを「家族」の一員として受け入れ、死んだ息子の代わりとして期待した赤鬚の主人と、それに応えようと勉強したブドリの間には、擬似的な親子関係が形成されたが、この親子関係もまた、自然災害によって、崩壊せざるを得なかった。

では、これらの自然災害による「家族」の崩壊は、ブドリの行動にどのような影響を与えたのであろうか。

恩田逸夫は、「ブドリの行動を推進させてゆく要素として△学習・勉強▽ということが指摘される。」と述べ、ブドリの行動の動力源として、「学習」という要素が強く表現されていることを指摘した。

確かに恩田が論じたようにブドリの行動には、常に成長しつづけようとする強い学習意欲が見られる。その点から、彼の行動は、学習と非常に密接な関係にあることがわかる。だが、このブドリの行動を推進させているものは、単に△学習・勉強▽したいという欲求のみなのであろうか。

ブドリが、最初に学ぶのは、森のてぐす工場であった。ブドリはそこで、てぐす飼ひの男の置いていった本を使って、字や図を書く練習を行う。この場面におけるブドリの学習は、自分自身の成長のためであり、次の学習の基礎作りであった。

だが、次にブドリが移動した野原で赤鬚の主人に「死んだ息子の読んだ本」を託されたときから、ブドリにとって学習は単なる△学習・勉強▽への個人的欲求ではなくなったのではないだろうか。むしろ野原での△学習・勉強▽は、息子の代わりに、ブドリにオリザ栽培を託した赤鬚の主人のためという要素が大きいのである。ブドリの中では、赤鬚の主人と出会い、その思いを託され、学び始めたことによって、幼少期に体験したブドリ自身の「家族」への思いが再認識されたのではないだろうか。そして、その二つの「家族」のために、自然災害を克服し、二度と「家族」を崩壊させずに済む方法を学びたいという学習・行動の方向性

が獲得されていったと考えられる。つまりブドリの学習は、両親と、赤鬚の主人の二つの思いを継承した「家族」の一員としての活動なのである。そして、野原から都市へと向かう途中で、ブドリの思いは、両親・赤鬚の主人の「家族」を中核として、多くの「家族」の崩壊を防ごうとする方向に拡大してゆく。そのブドリの思いを挙げる。

ブドリは、いろいろな思ひで胸がいつぱいでした。早くイーハトーブの市に着いて、あの親切な本を書いたクーボーといふ人に会ひ、できるなら、働きながら勉強して、みんながあんなにつらい思ひをしないで沼ばたけを作れるやう、また火山の灰だのひでりだの寒さだのを除く工夫をしたいと思ふと、汽車さへまどろこくつてたまらないくらゐでした^{一八}

以上のような目的をもってブドリは火山局で学習し、火山の噴火を人工的におこし、大爆発を防いだり、窒素肥料の雨を沼ばたけに降らせるなどの行動を行った。この行動が、自然災害による「家族」の崩壊を防ぎ、「家族」の幸せのために役立ったことは、もう一人の「家族」である妹ネリとの再会において証明される。

冷害による「家族」の崩壊によって、離れ離れになってしまっていたネリは、火山局が空中から肥料を撒いた際に、その作業を誤解した農民によってブドリが殴られて入院したという新聞記事を見て、ブドリを訪ねる。ブドリは「一人の日に焼けた百姓のおかみさんのやうな」^{一九}様相をしたネリに再会するのであった。ブドリに対して、ネリが現在生活して

いる牧場の話をする場面を見てみよう。

ブドリが、その後のことをたづねますと、ネリもぼつぼつとイーハトーブの百姓のことばで、今までのことを談しました。（中略―論者）今年は肥料も降ったので、いつもなら厩肥を遠くの畑まで運び出さなければならず、大へん難儀したのを、近くのかぶらの畑へみんな入れたし、遠くの玉蜀黍もよくできたので、家ぢゅうみんな悦んでゐるといふやうなことも云ひました。^{一〇}

この話からネリの現在の「家族」は、火山局でのブドリの学習・行動の成果によって幸せに暮らしていることがわかる。

離散してしまった妹ネリに再会できたことが、ブドリにとって非常にうれしかったことは間違いない。また、そのネリが、結婚して新しい「家族」をつくり、幸福になっていることを聞いたときのブドリの喜びは大きかったであろう。しかし何より、ブドリにとっては、「家族」の崩壊を防ぐという自らの学習・行動が、ネリの「家族」に表象される多くの農民の幸福につながっていることを実感したことこそが、本当にうれしいことだったに違いないのである。「イーハトーブの百姓のことば」で話すブドリの妹ネリは、単に生き別れになった妹ではなく、まさにブドリによって救われている農民の表象なのである。

ブドリにとっても、多くの「家族」にとっても幸福な期間が過ぎていった。

しかし再びブドリの「家族」を崩壊させた冷害の再来が予報される。

この冷害の再来に対して火山局は予報は出来るものの、有効な対策を立てることが出来ない。

ブドリは、冷害の再来の予報に、次のような感情を抱く。

ところが六月もはじめになって、まだ黄いろなオリザの苗や、芽を出さない樹を見ますと、ブドリはもう居ても立つてもゐられませんでした。このままで過ぎるなら、森にも野原にも、ちやうどあの年のブドリの家族のやうになる人がたくさんできるのです。^{一一}

ブドリの学習・行動の目的が自然災害による「家族」の崩壊を防ぐことにあったことを考えるならば、ブドリが、「居ても立つてもゐられ」なくなってしまった理由は明白である。ブドリにとって、学習・行動は、ブドリが経験したような「家族」の崩壊を、他の多くの「家族」に味わせないためであった。そのための火山局技師の仕事だったのである。しかし冷害の再来が予報された時、それに対して有効な解決法が見つからないことは、多くの「家族」の崩壊を意味していた。それはまた、今までブドリの築いてきた学習・行動の限界を示し、自らの無力さを刻み付けるという「恐怖」を持っていたのであった。

繰り返して言うが、「グスコープドリの伝記」において、主人公は、幼少期の「家族」の崩壊、さらに赤鬚の主人との擬似的な「家族」関係の崩壊という、二度の「家族」の崩壊を経験した。そしてその結果、親の無念の意思を継ぐ後継者として、自然災害の克服を目的として、学習・行動したのであった。冷害の再来が予報されたとき、ブドリにあったの

は、自らの学習・行動が、結局「家族」を崩壊から救えないという「恐怖」であった。

もはや、「家族」の崩壊を防ぐ手段が、一人の「死」でしか叶えられないと知ったとき、ブドリは、「家族」の崩壊を防ぐことを目的とした学習・行動の延長線上として、自らの「爆死」を選択する。

グスコープドリの「死」は、主人公ブドリの万人に対する個人的な英雄の「死」ではなく、また、単なる両親に対する恩返しや農民への愛情ではない。自然災害によって崩壊した二つの「家族」の無念や怒りを継承した息子の、自然災害を何とか克服しようとする行動だったのである。それは、崩壊してしまった「家族」の一員として、これ以上は二度と「家族」の崩壊を起こさせないという強い思いの表れであった。

「家族」という視点から見ると、「グスコープドリの伝記」におけるブドリの「死」には、家族の一員としての「死」という重要な側面があったということが出来るのである。

〔注〕

一 オリザは、稲のラテン語の学名「*Oryza sativa*」からとられたものである。「稲」ではあまりに現実に近い寄りすぎてしまったため、この名前になったと推測される。

二 本論文では「家族」を、夫婦・親子関係に基礎をおく生活共同体として捉える。(参考 光吉利之他編『リーディングス 日本の社会学』 伝統家族』東京大学出版会 一九八六年八月二〇日)

三 栗原敦「賢治童話名作館 グスコープドリの伝記」(『国文学 解釈と教材の研究』第三二巻第六号臨時号 學燈社 一九八六年五月二十五日 一四五頁)

四 秋枝美保「グスコープドリの伝記」論(『国文学 解釈と教材の研究』第三七巻第一〇号九月号 學燈社 一九九二年九月十日 一〇四頁)

五 中野新治「宮沢賢治・童話の読解」翰林書房 一九九三年五月十日 二〇〇頁

六 注五 同書 二〇一頁

七 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第八巻 童話Ⅰ 本文篇』筑摩書房 一九九五年五月二十五日 三〇五～三〇六頁

八 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第十一巻 童話Ⅳ 本文篇』筑摩書房 一九九六年一月二十五日 二五頁

九 注八 同書 三六頁

一〇 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第十二巻 童話Ⅴ・劇・その他 本文篇』筑摩書房 一九九五年十一月二十五日 二二七～二二八頁

一一 注八 同書 四二頁

一二 注一〇 同書 二二一頁

一三 宮沢賢治『新校本宮沢賢治全集 第十五巻 書簡 本文篇』筑摩書房 一九九五年十二月二十五日 二二六頁

一四 宮沢賢治『宮沢賢治全集 第五巻 詩Ⅳ 本文篇』筑摩書房 一九九五年八月二十五日 一五六頁

一五 注一四 同書 一四二～一四三頁

一六 注一三 同書 二七二頁

一七 恩田逸夫「宮沢賢治論」童話研究・他』東京書籍 一九八一年一〇月二十七日 一三八頁

一八 注一〇 同書 二二三頁

一九 注一〇 同書 二二六頁

二〇 注一〇 同書 二二六～二二七頁

二一 注一〇 同書 二二八頁

二二 注一〇 同書 二二八頁